鹿児島空港のあり方検討委員会

中間とりまとめ

１．はじめに

鹿児島空港においては，近年，新規就航や増便が相次ぎ，利用者数が増加傾向にあり，特に，国際線利用者数は５年連続で過去最高を記録している。

一方，航空業界においては，LCC の台頭を一因とする世界的な航空需要の増加や，新型機材の開発や，空港業務における効率化・高度化・省力化・自動化等の技術革新が進められている。

加えて，国内においては，新幹線等他の高速交通体系との競争や，空港間競争の激化が進むとともに，将来の人口減少に伴う労働力不足等が懸念されている。

このような空港や航空業界を取り巻く様々な環境変化に的確に対応するためには，新しい時代に相応しい鹿児島空港のあり方が求められていることから，鹿児島県においては，「かごしま未来創造ビジョン」を踏まえ，同空港の機能強化の観点から，概ね１０年後を見据えた「鹿児島空港将来ビジョン」を策定することとし，同ビジョン策定に当たり必要な助言を行うことを目的として，本検討委員会を設置したところ。

２．これまでの検討経過について

本検討委員会は，第１回検討委員会においては，鹿児島空港の概要，LCC の台頭や外国人観光客の増加，新たな航空関連技術の活用可能性等の鹿児島空港や航空業界を取り巻く環境変化について共有した。これに対して，委員からは，「他空港との競争が激化している状況を念頭に置かなければならない」，「国際線の拡充と合わせて，離島便を充実させ，インバウンドを離島へ運ぶ仕組みを作るべき」，「ビジネスジェット対応を充実させる必要がある」など，同空港の現状や課題について様々な意見があった。

第２回検討委員会においては，第１回検討委員会における議論を踏まえ，７つのテーマと１８の論点を整理するとともに，今後の航空需要予測について意見交換を行った。委員からは，「地域航空を発展させるため，パイロット養成や機体整備の拠点機能を強化すべき」，「今回の国際線の需要予測については控えめで，上方修正すべき」，「ターゲットを LCC 利用者と富裕層に分けた上で，観光戦略との連携を図る必要がある」など，様々な意見があった。

第３回検討委員会においては，これまでの議論を踏まえ，鹿児島空港の将来像として，視点や数値目標，具体的内容について一定の共通認識が得られたところ。

３．鹿児島空港の目指すべき将来像について

≪鹿児島空港の機能強化に求められる視点≫

○　新たな航空需要や潜在可能性の大きい外国人観光客需要を取り込める空港

○　空港間競争において航空会社に選ばれる競争力を有した空港

○　地域における経済振興や災害対応等の多面的な機能を有する拠点性の高い空港

≪鹿児島空港の目標≫

○　数値目標

2030 年乗降客数　730 万人（国内線 589 万人，国際線 141 万人）

2050 年乗降客数　830 万人（国内線 600 万人，国際線 230 万人）

○　具体的内容

- 国内外の多様な空港利用者に対する高い満足度と利便性
- アジアを中心とする海外都市や国内主要都市及び県内離島とを結ぶ多様な航空ネットワーク
- 国内外の観光客が利用する日本の南のゲートウェイ
- 最先端の技術やノウハウの導入による効率的運用が可能な航空会社の拠点空港
- 物流や輸出入，航空関連産業等の地域経済振興拠点であり，災害対応の拠点

４．今後の検討について

当委員会においては，平成 31 年度中の「鹿児島空港将来ビジョン」の策定に向けて，上記の鹿児島空港の目指すべき将来像を踏まえ，将来像実現のための施策展開の方向性や，将来像実現に向けた取組等について，実務者等で構成されるワーキンググループの意見も参考にしながら，引き続き，協議・助言を行うこととする。

以　上